

---

# 恋する頃を過ぎて

みっこなっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する頃を過ぎて

### 【Nコード】

N2172Z

### 【作者名】

みつこなつこ

### 【あらすじ】

恋に臆病になってしまっている「私」の、雪解けと春、別れと出会い。東北にある小さなとある大学で「私」は「彼」に出会い、止まっていた時間を巻き戻すように、力をとりのもどしていく。（ムーンライトノベルの方で連載する予定でしたが、R18要素がないので、こちらに転載し、連載再開します。）

## ブローグ 薄氷と涙（前書き）

R18的シーンはありませんが、それに準ずる単語、表現は含まれます。苦手な方はご遠慮ください。

がんばって書いていますが、素人で未熟なため、稚拙な部分が多々あると思われます。ご了承くださいませ。

## ブローグ 薄氷と涙

冬が好きだ。

特に、朝の空気がたまらなく好きだ。

まだ布団の中で温もっていたい体を無理やり起こして、窓辺に立つ。雪が積もっていたりすると、子供の頃のように、飛び跳ねて喜びたくなる。

窓を開けて、外の空気を少しだけ吸い込む。

肺まで凍りつくような空気に、一瞬体が震えるけれど、同時に、背筋がぴつと伸びるような心持になる。

自分のからだは地球の一部で、自然の循環の流れにきちんと乗っている。気を抜いていると、その中に取り込まれ、命を奪われる危うさを持っていることを、やんわりと教えてくれている気がする。

窓を閉め、オイルヒーターにスイッチを入れる。

フリースの上着を羽織って、キッチンに向かい、やかんに湯を沸かす。

湯が沸くまでの間、コーヒーを淹れる支度をする。フィルターを二枚丁寧に織り、ドリッパーに据え付ける。豆はすでに挽いてあるものを、冷凍庫から取り出し、きちんと量って入れる。

沸いた湯を、円を描いてゆっくりと注ぎ、しばし蒸らす。そしてその日の気分によって、濃さを調節しながら、湯を注ぐ。部屋中に焦がされた香ばしいいい香りが充満する。

お金はあまりないから、パンは安いものを食べる。しかしコーヒーだけは、少し値がはっても、行きつけの喫茶店で使っている豆を買って、飲んでいる。酸味はなるべく少なく、苦味はできるだけ強めがいい。マスターは私の好みを知っているから、いつでもいい具合にブレンドしてくれる。

仕事がある日も、休みの日も、いつでも決まって朝はこんな感じ

だ。

二十歳を過ぎた頃から、特にきちんと朝起きられるようになったと思う。いつもと違う時間に起きると、かえって体調が悪いということに気がついた、というのもある。

だらだらと朝を迎えると、夜、眠りに落ちる時も、一日の終わりがあいまいになる。同じ一日がもう二度と来ないことを、実感せずに終えることは、次の一日の始まりをもあいまいにする。そうして一週間、一か月、一年、と、曖昧なままに過ごしてしまわないよう、気を引き締める意味で、朝はきちんと起きることに決めている。

特に朝、テレビはあまり見ない。

静まり返った心の、波風のたっていない水面のような状態を、なるべくそのままにしておきたいから。

まだ二十四歳なのに、自分でも、年寄り染みているな、と笑ってしまう。

どうしてそうなったのだろう。最近、過去を振り返っていることが多いからだろうか。とにかく気持ちの方向が、内に内に向かう気がする。

そうして思い出されることは、いつも決まっている。

私は恋が苦手だ。

唐突な質問だが、なぜ、人を殺してはいけないのか、と問う。

同時に、なぜ自ら死んではいけないのか、とも問う。

私の答えはいつでも決まっている。

「宇宙の法則で、だめだと決まっているから。」

そう。答えは簡単だ。だめなものはだめなのだ。そこに理由なんて必要ない。それが答えだ。それ以外にない。

理由をつけてしまったら最後、途端にもろく、くずれやすくなっ

て消えてしまうものが、この世にはたくさんある。

たとえば恋。そして愛。

その気持ちに形をつけ、理由をつけ、守ってゆくことは大切なことだけれど、形あるものはいつか壊れるし、理由や理屈はいつだって覆すことができる。

私がそのことに気がついたのは、高校二年生の夏。

周りのみんながそうだったように、私にも彼氏ができて、そして、体を重ねた。

たった一度だけ。

彼は私の利用する電車で、ときどき顔を合わせる、他校の生徒だった。告白されるまで、名前も性格も、声すら聞いたことのない、男の子だった。私のことを電車の中で、いつも見ていた、と彼は言った。

あまり深く考えないたちだった私は、彼の告白を喜んで受け取り、そして付き合うことにした。

嫌いなタイプではなかった。付き合っているうちに、好きになれるだろう、と、思っていた。

秋が来て、お互いのことがようやく分かりかけた頃、雰囲気流されるようにして、体を預けた。

そこで、ようやく気がついてしまったのだ。

抱かれた腕の中で、彼に恋する気持ちを、自分は持ち合わせてないなかった、と。

下腹部に走る、裂けるような痛みと共に、何か大事なことを見過ごしてここまで来てしまったことを、激しく後悔した。もう二度と帰らない、この瞬間を、自分はなんてぞんざいに迎えてしまったのだろう。

そのあと、私は彼に恋する理由を必死になって探した。

笑った顔、優しさ、逞しさ、大きな手。通り一遍の理由をすべて並べても、自分を納得させられるだけのものは見つからず、かえっ

て掴みどころのないものへと姿を変えてしまった。

見ようとするとかえって見ることでできない、弱い光の星や星雲のように、彼への恋心はたちまち、暗闇の中に沈んでいつてしまったのだった。

夏に始まった恋は、すぐ、冬に終わりを告げた。

彼の、私への恋心は、たぶん本物だった。けれど私の方かというと、彼の恋心を反映するだけのスクリーンに過ぎず、彼の求める恋愛を、自分の求める恋人の姿を、演じていただけだったのかもしれない。

誰もが、甘酸っぱいと感じる、失敗とも思えるような、そんな体験を、私は大人になった今でも、引きずっている。

冬が来ると、いつでも思い出される。

雪の降る、駅のホームの端で、彼の流した涙と、そのあとの哀しい笑顔を。

「誰でもいいから、つきあってみたら？　つきあってみないと、分からないものよ。」

そう、周りは言うけれど、同じ過ちを繰り返さんとする、私の心は動かない。

冬の匂いが迫るあの日、流した血と、痛みが、踏み出そうとする一歩を押しとどめるのだ。

もし次に恋をするなら、漫画みたいなもえるようなものでなくていい。めくるめくロマンスもいらさない。ただ、穏やかに、側に寄り添いたいと思えるような人と、共にありたいと願う。

形や理由などなくても、ただ好きだ、愛しいと思う気持ちだけで、一緒にいられる関係。

やみくもに手を伸ばして、また失わないように、そっと、そっと、守ってゆきたい、私の大切な願望。

どうか、あの日の彼が、その後幸せでありますように。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2172z/>

---

恋する頃を過ぎて

2011年12月7日22時52分発行